

19【街の散策からの気づき発見】

江戸川散策1

会員 K.T.

龍Q館に車を止め、江戸川の下流方向を散策する。堤防下に広がる平野は旧・庄内町である。平成17年(2005)春日部市と合併し、春日部市となった。ウィキペディアや『春日部市史 庄和地域』で調べると、古くは、11世紀の平安時代に八条院暲子内親王への寄進荘園として下川辺荘が開墾された一部らしい。下川辺荘は現在の茨城県古河市・五霞町、千葉県野田市、埼玉県加須市・久喜市・幸手市・杉戸町・春日部市(旧庄和町)・松伏町・吉川市・三郷市にまたがる広大な荘園だった。その後、支配者の栄枯盛衰により、複雑な支配地域になった。16世紀後半、豊臣秀吉の太閤検地により、下川辺荘の複雑な所有権や支配権が解体された。17世紀に江戸幕府が成立すると、旧庄和町周辺地域は江戸幕府の天領となった。

関東の地は徳川家康の国替えから新しい歴史が始まった。家康の旗本大久保彦左衛門忠教(ただたか)の著とされる

『三河物語』に家康の国替えについて、記されている。「三河・遠江・駿河・甲州・信濃五ヶ国に、伊豆・相模・武蔵・上野・下総・上総の六ヶ国へ換えさせられ、関東へ庚刀(かのえとら)の年(1590)うつらせたまう。」

三河は現在の愛知県の一部、遠江・駿河は静岡県の一部、甲州は山梨県、信濃は長野県、伊豆は現在の静岡県の一部、相模は神奈川県、武蔵は埼玉県と東京都、上野は群馬県、下総は茨城県の一部、上総は千葉県の一部になる。家康が国替えにより江戸へ入った当時、関東の地は利根川・荒川・渡良瀬川の大河が江戸湾(東京湾)に流れ込んでおり、それらの川の氾濫で、川の流域には多くの池沼や湿地帯がひろがり、関東の地の多くは荒地であった。農業生産力の低い地が多く、家康の本拠となった江戸の地も低湿地帯が広がり、寒村、寒漁村が点在する未開の地だった。この打開策として、利根川・荒川・渡良瀬川の河川改修が60年に渡って続けられ、利根川は江戸湾から銚子沖へと瀬替えされた。現在の関東の大河の川筋はほぼ、江戸時代前期の河川改修で、現在の川筋がつくられた、といえる。利根川の東遷、荒川の西遷といった大河の流れを変える河川改修により、新田開発が進み、関東の広大な湿地帯は穀倉地帯となった。一方、庄内領低地地域を流れる庄内川(権現堂川は現幸手市の宇和田から庄内川と呼ばれていた)流域は、河川改修後、利根川と渡良瀬川の全水量を受け、大雨で川が増水するたびに洪水を起こす地域となった。「一益あれば一害あり」、かつて利根川の瀬替え以前、庄内川の左岸沿いで栄えていた庄内領と右岸沿いで栄えていた幸手領の低地は、洪水のたびに水没する広大な遊水地となってしまった。これらの低地が安定して干拓されるのは、諸説あるも、寛永12年(1635)から同18年(1641)関宿より金杉(現松伏町)にかけて台地を開削した江戸川が開通した後、正保年間(1644～1648)になるといわれる。庄内川は河川改修の中で締め切られ廃川となった。江戸川の堤防を歩くと、堤防よりも低い位置に住宅や田んぼがあり、この川が台地を開削した河川であることがわかる。江戸時代初期、人手により、クワともっこで関宿(野田市)から金杉(松伏町)の区間、約18kmが開削された。金杉からの下流は旧庄内川の川筋になるが、関宿から下流は江戸通船の路として江戸川の名称で統一された。江戸川の初期の川幅は47m、明治中期に100m、後期に250m、昭和中期に現在の400mの川幅に改修された。いずれも洪水対策の河川改修として引堤され、今の川幅に広がっている。水害以外に、漠然ながら不安に思う事がある。私共の身の周りは化学物質に囲まれている。自然界では分解しないミクロン・ナノ単位の永遠の化学物質が川に流れ込み、川から海へと流れている。蓄積すれば未知のリスクがある。現在に生きる私どもは、とかく現在が過去の延長の上にあること、未来は現在の延長の先にあることを忘れがちである。『川の未来は・・・』と、江戸川を散策しながら思う。

